

日本語教育指導法

科目：日語教學專題研究

指導教授：馮寶珠 老師

系級：日研二

姓名：簡嘉菁 489246190

曾大偉 489246140

曾琬鈴 489246102

洪乙文 489246011

楊涓櫻 489246085

張群定 489246061

一、聴解指導

1. 聴解

「聴解」というのは「独話の理解」ということである。「独話」というのは、ある特定の話し手が多数を相手に話すこと、またその話ということである。独話には、お知らせ・説明・解説・演説・講演・説教・式辞・ある種の演芸などがある。

2. 聴解能力

独話を理解するにどんな能力が必要なのかを次のように述べる。

- ① 話を聞きながら、文脈を急速に把握する能力
 - ② 話の中の未知の語句の意味を補って理解する能力
 - ③ 話の段落ごとに要旨をまとめる能力
 - ④ 話を聞きながら、必要な事項を記憶したりメモに取ったりする能力
- 外国で日本語を学習する人にとって、聴解が難しいと言われている。なぜなのか、聴解の練習は読解練習より少なく、日本語は聞きなれない海外の学習者が多いというまでもない。だから、聴解練習をしなければならない。

3. 日本語の特質と聴解

外国人にとって、日本語の学習を困難なものに感じさせているのは、日本語と母国語の特質の違いからくる困難である。そのうちに聴解で問題となる点は次のように述べる。

- ① 述語の位置
- ② 主語の不在
- ③ 助詞・助動詞
- ④ 同音語の多いこと

以下、項目ごとに問題点と指導方法について述べる

- 1) 日本語の文では述語が文末に来るので、最後の述語を聞くまでは文意の把握ができないと考えている学習者が多い。例えば、「どこも」「ちっとも」「全然」「二度とふたたび」など、初級・中級程度以上の独話に否定の先触れは多く使われている。また、時を表す名詞が早く出て、述語の時制を知らせるなど、決定的な述語が出てくるまでに、状況は暗示的に説明されるので、日本人にとっては思いがけない述語が文末に現れ、どんでんがえしとなるということはあまりない。

また、音声言語であるからには、アクセント・イントネーション・プロミネンス・速度などが、文の意味の決定、感情の表出に大きな働きをしているはずである。このような音声的要素に大きな注意を

向けさせなければならない。

例：

イントネーションの違い	
この花はきれいじやない。	否定の意味
この花はきれいじやない。	婉曲の肯定

アクセントの違い	
☐ アメ	雨
☐ アメ	飴

- 2) 日本語では主語が略されている文がたくさんある。その前文との脈絡を注意しなければならない。
- 3) 聴解の場合で、助詞ひとつの誤解が誤解を生んで、全くの混乱状態に陥ることさえある。

例：日本銀行は景気対策のキメ手として/早ければ/今週中にも/公定歩合の一厘引き下げに踏み切る態度を固めました。

これは新聞の見出しでもしばしば見られる「にも」の使い方だが、これを「前にも...、今週中にも...」と解しては事実と違う。

4) 同音異義語

同音異義語は、外国人が聞く場合には、用語が混同されることが少なくない。聴解練習をする時、このことを注意する。

例：きょうそう：強壯、競争、競走、協奏、狂想、狂騒、、、
こうよう：効用、公用、高揚、紅葉、昂揚、綱要、広葉、、、
しんこう：進行、信仰、進行、親交、振興、侵攻、深厚、、、

4. 聴解の指導方法

聴解の指導方法	メリット
1 コンプリヘンション・アプローチ ...Comprehension Approach 直接にビデオの教材による、聴解練習だけに絞り、聴解能力が十分確立するまで発音練習や発話練習は行わない方法。学習内容の意味はテレビの画面を通して直接的方法で理解させる。文字学習は最初の授業時間から始められる。 例：NHKの『子どものニュース』 テーマ：リサイクル 始めに、リサイクルに関する用語を教える。 (再生、コストダウン、商品などの言葉)	① 直接にビデオを見ることにより、聞き取りの集中力を訓練することができる。 ② また、始めに語彙を習うことによって、聴解の内容を一層理解できる。
2 OHR ソメット...Optimized Habit Reinforcement Method 効果的な習慣を強化する教授法 テープと絵を中心にしたプログラム教材で、段階的に自習を進めていく。 例：教科書のテープ及びCD ROM	自分のペースで自由的に無理なく学べる方法。
3 TPR Total Physical Response 全身教授法 入門段階では教師が目標言語で命令し、学習者はその命令に従って行動することで命令を理解したことを示す。この段階では、学習者は命令内容の理解とその音声的特徴の聞き取りを習う。発話活動では学習者が目標言語の音声に十分慣れたから、自発的に発話できるようになる。 例：NHKの『お母さんと一緒に遊ぼう』番組 方法：子どもが先生または母の話を聞いて、次にその動作をする。その遊び方により、自然に言葉を覚え、話せる。	① 学習者の聴解活動をその身体的動作と結び付けて記憶を強化することができる。 ② TPRでは言語学習における両脳使用と初級学習者のプレッシャー軽減が学習効果の向上に役立つものとしている。

4	ナチュラル・アプローチ Natural Approach 学習者に言語習得を促進させるために、聴解の授業をする前に、教師が適当に言語のデータをインプットする。自然でリラックス状態で、学習者に理解しうる程度の言語を聞かせ、聴解能力を向上させる。 例：「ニューロ・コンピュータ」というニュース データ：(1) 東京秋葉原の電器店 (2) セールスポイント (3) 大手電気メーカー (4) お利口になった (5) 格段アップ	①教師は学習者の不安を取り除き、自分自身へのよいイメージをもたせ、学生に学習動機を強化させる。 ②学習者は聞き取り練習をする前に、データベースということが先ほど知って、聴解の内容が早く理解できる。
---	---	--

5. 視聴覚教材による聴解の指導方法

1) 視聴覚教材の特性

a. 学習意欲をたかめ、動機づけを強化する

言葉のみで説明するよりも具体性の高いものをしてしめして感性的に理解させた方が学習効果も上がり、能率的であることはだれもが経験している。

b. 経験の限界を拡大する

視聴覚教材は時間、空間を超越した世界を提供する。教室にいない事物を映像を用いて示すことができる。

c. 現実を再構成する

視聴覚教材は学習者の理解を助けるために、表現上の技術を駆使して現実を再構成したり、再配列したりして、多角的、具体的且つ総合的に示すことができる。例えば「一テクル」「一テイク」「一（二）ナル」等の時間的推移の概念を特殊撮影等の技術によって具体的に提示することも可能である。

d. 多数の人びとに共通の経験を同時に与える

視聴覚教材を使えば、多人数に一度の経験を与えることができる。この特性は例えば自由会話の前に共通の話題を作り、学習者の積極的参加を即すために利用できる。

e. 繰り返し利用が可能

視聴覚教材は一度作っておけば何回でも繰り返し条件で利用できる。
録音テープによるテストや多量のドリル等はこの特性を利用したものである。

2) VTR 視聴

a. 番組への指導

上級の聴解指導について述べよう。学生に興味ある教材（あるテレビ番組）を選んで指導する。授業では始めに教材について予備知識を与える。そのときカギになる語句で未習のものがあれば教える。またその語句について説明し関連語句も与える。これから聞く教材のカギになる語句だということで、学習者は懸命に吸収する。

b. 方法： 第一回の視聴のあと、学習者に意見を述べさせる。不十分ながら、ひとわり述べさせたあと、教師が内容について質問する。また、第二回の視聴をする。必要な箇条でメモをさせたあと、教師がその内容について質問する。また、解説を加える。

c. 時間：仮に 90 分の授業を例にとると、VTR 視聴の時間は 45 分、その間に 3 回の視聴を行うには、教材の長さは 15 分を越えないものと用意する。時間配分は以下のように示す：

導入	15 分
第 1 回再生視聴	15 分
第 2 回再生視聴	15 分
解説	30 分
第 3 回再生視聴	15 分

3) 文字化教材について

記憶を定着させるために文字を使うことは必要である。そのための有効な方法は、学習者自身によって、必要な語句・文を文字化させることである。

6. 聴解の教材

1) 内容としては、日本語の文化的背景、すなわち日本の風土・人・社会現象・歴史・芸術・宗教、日本人のものの考え方などに関連のあるものがよい。

例：「神戸・六甲」（NHK「新日本紀行」）

「禅寺の雲水」（NHK「若い世代」）

「村の弁慶号」（NHK「新日本紀行」）

2) 教材として、映画・テレビドラマなども、慎重に選べばよいものがある。

具体的に何をいつ与えたらよいか、それは学習者の学力と興味の志向するところを考慮して決めなければならない。

二、話し方の指導法

1. コミュニカティブ・アプローチ

1.1 定義

コミュニカティブ・アプローチという用語は広い意味で「伝達能力の育成に重点をおく教授法」全体を指すのに使われる場合もあるが、概念シラバス (notional syllabus) や機能シラバス (functional syllabus) による外国語教授法を意味する場合もある。

1.2 原則

- 1) クラス活動では、今「何を」しているかを知っていなければならない。

必要なのは教師も学習者も今行っているクラス活動は実際の(クラスの外での)コミュニケーション活動でどんな場合に「使える」のかを知っていることであり、ある課を勉強したら、語彙や文法の知識が増えただけでなく、新たに「何」ができるようになったのかを考えるべきである。

- 2) 言語の部分を学習するだけでなく、全体にも目を向けなければならない。

実際のコミュニケーションでは、やりとりされる「文」が互いに支えあって、一つの「流れ」を作っているのであるから、その「流れ」に関わる「文」のすべてが理解できなければ、そのコミュニケーションに参加していくことができないのである。

- 3) コミュニケーションでは、伝達過程は言語形式と同じように重要である。

a. インフォメーション・ギャップ (information gap)

実際のコミュニケーションでは、「ある情報」を「知っている人」と「知らない人」との間でその情報の差、つまり、インフォメーション・ギャップを埋めるための「やりとり」が行われることが多い。

b. 自由な選択 (choice)

実際のコミュニケーションで大切な点は、それぞれの話し手は自分が何をどう言うかについて選択できる、あるいは選択しなければならないということである。

c. フィードバック (feedback)

参加者はそれぞれに会話に参加する「目的」があるはずである。話し手はいつもその目的を達成するために発話しているのであるが、同時に、相手の反応にも注意しながら話を進めていく。

- 4) 言語を学ぶには経験することが大切である。

言語の伝達能力が強化されれば、インフォメーション・ギャップを埋め

たり、相手からの情報入力に対して、自分の選択を行ったり相手の発話を評価して、それに対して自分の発話を調整したりすることができるようになるが、そのような活動を行うのはあくまで学習者である。

5) 学習者の犯す誤りは必ずしも誤りではない。

コミュニケーションの成立を重視するために学習者の誤りを見過ごし、誤りを増加させているということであるが、それには二つの要因が考えられる。

- a. 第一の要因は、教師の態度にある。
- b. 第二の要因は、学習者のレベル以上の学習活動にある。

1.3 指導法

1) 目標の設定

授業の開始にあたって、教師は学習者に対して「この時間」或いは「この課」の学習はコミュニケーションの面で”何ができる”ようになることが目標かを説明する。

2) 提示と文脈化

コミュニカティブ・アプローチでは学ぶべき語彙や文型を示すのではなく、。そこで行われる発話がその場面において本当にどのような意味で使われるかを教えていく。発話の文脈化は次の要素からなっているとされている。

- a. 発話の概念的内容。
- b. 話し手の社会的地位。
- c. 聞き手との関係。
- d. 発話の意図。
- e. 発話の場所。

3) 練習から転移へ: コミュニケーションのための言語使用に重点を置く。

- a. 教師が学習項目（対話のある文）を提示する。
- b. 学習者たちがそれを復唱する、いわゆる「反復練習」を行う。
- c. 一人の学習者にある文を復唱させ、その文に対して、学習者たちに各自の応答をさせる。
- d. 学習者を二人ずつ組み合わせて、その対話の練習をさせる。
- e. 対話の分担役割を換えたり、組み合わせを換えたりして、更にその対話の練習をする。

4) ロールプレイとシミュレーション（模擬実験）

5) コミュニカティブ・アプローチと聞き取り練習

6) コミュニカティブ・アプローチと読解練習

7) コミュニカティブ・アプローチと文字伝達練習

8) コミュニカティブ・アプローチと日本語教育
2. 初級日本語会話教育の実践—銘伝大学応用日本語学科—

呂恵莉氏の著作¹⁾により、銘伝大学で教鞭を取っている呂氏自身は学習者の学習意欲と初級階段での言語運用能力を高めるため、「大一会話」で次のような方法を試みた。

- 1) ロールプレイ²⁾
- 2) 自己開示のためのエクササイズ

ロールプレイの進め方と指導例に入る前に、ちょっと言語運用能力について、説明しよう。呂氏の説明により、言語運用能力とは：

ある言語を学ぶということは、必然的に正しい文を創り出す能力を身につけることを含んでいるが、それは言語を学ぶことの一面でしかない。言語を学ぶということには、これ以外に、特定のコンテキストにおいて、どのような文、或いは文のどの部分を用いればよいのかを見極める能力を習得することも含まれている。

これは、いわゆる言語運用能力のことである。つまり、学習した言語材料や表現手段をコミュニケーションで適切に使う能力である。

2.1 ロールプレイの進め方と指導例

「誘い」という表現を目標とするものを例として、ロールプレイの具体的な進め方を述べてみる。

1) 事前準備学習

<状況の理解のための学習>：教師は学習者に誘いについての経験を聞く。

<表現形式の強化のための学習>

①誘いの関する語彙・表現の復習と提示

②開放対話の練習：学習者が自分で考えて語句を置き換える練習である。

2) 実際のロールプレイの流れ

①役割を提示する：

学習者はカードの指示に従って、会話を行う。初級階段では、ロールカードは学習者の母語で提示する方が効率的だと思われる。

②ロールプレイを行う

i 学習者がペアになって、ロールプレイをする方法である。移動を行い

¹⁾ 呂恵莉(2000:119)参照

²⁾ ロールプレイ：或特定の場面の登場人物の役割を演じさせることで、与えられた状況で必要なコミュニケーションができるようにするための練習。

ながら、自分と異なるカードを持ったパートナーを探し、ロールプレイをする。

ii 教師は教室活動を見守り、質問に答えたり、助けたりする。

iii 15－20分経過し、終了のサインを出す。全員にペアになってロールプレイを演じてもらう。

3) 事後のフィードバック

学習者がロールプレイをしているときに、会話を中断させて間違いの訂正をすることは、会話の流れを妨げるので、教師は学習者の活動を見守り後でフィードバックできるように書き留めて置く。学習者のロールプレイデモンストレーションをビデオに録画するとか、テープに録音するとか、学習者の誤用を記録用紙に記入するなどのことである。

2.2 自己開示のためのエクササイズの実践

1) 今の私・将来の私

ワークシートを使って、今の所有物を書かせ、それから30歳、40歳になったことを想像させ、その時の所有物やしようことを書かせる。その後で発表する。

2) それは誰のことですか。

これはさまざまな個人情報をもとに、それが誰の情報化を当てる活動である。白い紙を学習者に配り、教師は次の6問を質問し、学習者に自分の答えを書かせる。書き終わったら全員の分を回収する。教師は皆の書いた情報をもとに「好きなスポーツは何ですか。」と1から6までヒントを出す。学習者はそれが誰のことかを当てる。

3. 中・上級日本語会話教育の実践1—南台科技大応用日本語学科—

挙げたのは南台科技大応用日本語学科講師である小林裕美氏がロールディスカッションの授業方法について発表した論文³である。

3.1 ロールディスカッションの指導例

<場面設定>

クラスの友人が携帯電話を授業中使用し、クラスメートと対立してしまったので担任教師が問題解決の為に学級会を開き、クラス全員が話し合いの中で問題解決策を出す。

³淡江大学応用日本語学科編小林裕美著(2000)「ロール(役割)ディスカッション授業の試み」(未出版)

<指示カード>

教師は指示カードの中に学生の役割とすべきことをちゃんと書く方がいい。今回の場合は、指示カードは「教師」、「学生A」、「学生B」、「其の他の学生」のような四枚が必要である。

<活動手順>

①導入

携帯電話の使い方についてクラス全体で話し合う。

②役割分担

ディスカッションの進度に支障を来たさないため、教師がアドバイスし任意制で決定。

③各役割の確認、その発言内容を各自整理する。

④ロールディスカッション開始、すべてカセットで録音した。

⑤グループで相手に対する反論をまとめ、再度ロールディスカッション開始。

⑥フィードバックとしてカセットを聞き、タスクシート記入。

⑦学習者全員が学習参加態度自己評価アンケートに記入。

4. 中・上級日本語会話教育の実践 2—高雄第一科大応用日本語学科—

この節では、高雄第一科大応用日本語学科の副教授である城地茂氏が「ディベート指導」についての論文⁴を例として、紹介したいのである。

4.1 ディベート指導法の実例

城地茂氏は上級レベルの会話授業で教室ディベートを取り入れ、ディベートに費やす時間が、会話授業の三分の一から半分程度実践した。

1)やり方：

形式としては、役割をグループ内の各人が、一人一つずつで、それを「肯定側立論、否定側からの質問、否定側立論、肯定側からの質問、(作戦会議)、否定側反論(反駁)、肯定側反論、否定側最終弁論(結論)、肯定側最終弁論、判定」の順に行った。

2)題材の選択：

五年生専科学校出身の学習者にとって、歴史、地理といった文化的教育は時間が取れなくなってしまうので、会話の授業で、文化的なことを数多く取り上げるように努めた。たとえば、

「日本の首相は、直接選挙すべきである」、

⁴淡江大学応用日本語学科編、城地茂著(2000)「学部3・4年次における会話教育と評価方法」(未出版)

「台湾の立法院を二院制にすべきである」、
「台湾の大学は学費を無料にすべきである」、
「もう一つ高速鉄道の駅を設置するなら、どこにすべきか」。

3) 教師指導のポイント：

- ①学習者の発表した議論がかみ合っているかを確認。
- ②弁論している学生は相手側の意見を聞き、自分たちの意見を日本語で表現できるかどうかを確認。
- ③日常は考えない高級概念が多いので、それを上手く使う練習を重ねた。特に、名詞は何とか探し出すことができるが、どの動詞を使うかということに戸惑う学生が多いので、これには、教師自身が指導にあたった。
- ④ディベートでは高度な日本語会話能力が要求されるので、初級・中級では実践が難しい。

4. 中・上級日本語会話教育の実践 3—淡江大学応用日本語学科—

淡江大学応用日本語学科講師黒島千代の論文⁵を通して、ほかの教室活動を紹介したいのである。参考したのは黒島千代氏が去年六月に『『商用日本語会話』における授業展開と考察』という題名で発表したものである。課程設計や教材などはすべてビジネス向けのものであるが、商用日本語会話は会話教育の一環として、不可欠な役割を果たしていると考えられる。特に、学習者は就職する際、商用日本語に関する知識を前もって身につけた方がいいのである。今回はこの論文に出た方法を簡単に説明したいのである。

4.1 社会で起こった事件を取り入れ、授業で活用する実践

《9. 2 1 台湾大地震》を取り上げ、討論を行う。

《目的》

台湾の社会が大きな打撃を蒙り、ライフラインにも支障をきたす中、現実を如何に認識し、社会的問題と如何に関わっていくか、ということを考える。

【留意点】

事前に、学生の家族に犠牲者や行方不明者がいないかどうかを確かめ、地震のことを授業で取り上げてよいかどうかの確認を取る。

【展開】

1. ペアを作って、地震の情報を整理する。教師が提供した資料は、朝日新聞の報道記事である。

⁵淡江大学応用日本語学科編、黒島千代著(2000)『『商用日本語会話』における授業展開と考察』(未出版)

2. 学生は自分の持っている情報と資料を突き合わせながら、報道者と質問者のロールプレイをする。
3. 一組終わるごとに、発表者はクラスの学生から質問を受ける。
4. 地震発生後から9月30日までの朝日新聞の記事とインターネットの情報を準備し、学生各自に選ばせる。
5. 学生は自分の記事をレポートできるようにまとめる。
6. 一人ずつ発表し、発表者のコメントを加える。
7. 聞き手は不明な点について質問する。
8. 教師によるフィードバック。

三、読解（初級レベル、中上級レベル）の指導

1. 読解指導とは何か？

文を読んで内容を理解することを読解という。そのような能力——読解力を養成するための指導が読解指導である。ふつう、読解指導は講読によって行われるものとされている。「講読」というのは、学習者にとっては難解な文章を教材として、教師が文の構造を分析したり、語句の意味を解釈したりしながら、文章に盛られた内容を学習者に理解されるという作業である。外国人のための日本語教育では、このような読解指導を受けるに必要な語学力をどのようにして積み重ねるかが、重要な課題のである。（図）

- 1) 精読：語彙の意味や文法事項などをすべて調べた上で、文の意味を考えるような読み方。普通の言語クラスでの「読解」の授業ではこの精読を通じて、目標言語の語彙や表現を学ばせることが多い。
- 2) 速読：文や文節、文献から大意をくみ取る読み方で、実際の社会生活で新聞、雑誌などを読む場合の方法。スキミングとも言う。
- 3) 目標情報を捜し出す読み方：指定された情報を文献から捜し出す練習で、タクスリーディング或いはスキヤニングとも言われる。

1.1 読解指導の目標

どの程度の読解能力を与えるかということは、学習の目的によって異なる。それはまた、学習者が、母国語による生活で、どの程度の母国語読解能力を所有しているかにもよる。

何を読むかではなく、何をどのように読むかということを学習目標としなければならない。どの学習者についても、次のことを目標としなければならない。

- 1) 読み終わると同時に完全に理解できること。
- 2) 各々の短文の理解のみでなく、長文全体の大意を把握できること。
- 3) 知らない語句は自分で辞書を引いて、文を理解する能力を持つこと。

1.2 読解の基礎学習

読解の対象となるのは書かれた言葉であるが、話される言葉は全く別の言葉であるわけではない。実際の言語活動を観察してみても、話す・聞く・読む・書くの4技能が、入り交じっている場合が少なくないし、またそうできなければ困るのである。今日のように、話すとおりに書かれたものの多い時代には、方法さえ誤らなければ、音声言語の学習と読解の学習を並行して行うほうが、読解学習の成果が音声言語学習へフィード・バックする効果もあって、全体としての学習効果を増大するものと考ええる。

次に、基礎学習の要素と考えられるものを項目別に述べる。

1) 文字

平仮名、片仮名、漢字の3種類を覚えなければならない。それは平仮名から片仮名へそして漢字へと進むことを意味しない。読解教材として必要なものから、バラバラに教えていってよい。(例文)

漢字学習では、それが音声学習を妨げないように注意しなければならない。その予防法は、漢字学習と話す聞く学習を同時に行うことである。

2) 語彙

読解能力を形成する重要な柱の一つは語彙力である。

同意語、反意語、対照語、関連語を教えるときには、単にその語を提示するのみでなく、日本語の語構成のあり方を会得させるような提示の仕方、解説、用例が必要である。(例文)

3) 文法

初級教材は文法事項と文型を柱として課をまとめるのが普通である。これは基本的な文法、文型の習得を目的とするためである。読解はこのような文法・文型を特に意識しないで読み、読みながら理解できるようにする学習である。基本的な文法が確実に習得されていることが読解指導のための必要条件である。

4) 文体

慣れない文体のために、読解に困難を感じることも多いから、種類の文体に慣れさせておかなければならない。文体についての学習は読解の中で行うべきものが多いが、それでも、初級の間に「である」体や「だ」体、日記、手紙の文体くらいは一応経験させておくほうがよい。

5) 言語の背景

以上述べてきた言語そのものについての基礎学習の指導がすべて手抜きで行われても、日本人の生活、日本の社会、伝統、行事、文化、歴史、宗教そしてそれらを支えている風土といったものについての知識、理解がなければ、読解能力は十分とは言えない。

1.3 読解の授業

1) 予習

中級以上の読解学習は予習することが必要である。

まず、与えられた教材を読んで、大意の把握を試みる。次に教材の中の知ら

ない語を自分で見つける。その語の意味を文脈から考える。その語がなくても文の意味がとれるかどうか、その語が文の中で文法上・意味上どのような地位を占めているかを検討する。

辞書をひくのは予習のうちの重要な部分であり、読解力養成に欠くことのできない作業である。

2) 教室作業

初、中級では、まず教師の指名で適当な分量を読ませ、その部分にある大切な語句について、意味または言い換えを言わせる。反意語、対照語、類義語などがあれば、それも言わせる。学習者は予習で調べにおいて、これに答える。そのあと、内容の理解ができているかどうかを確認するため、次のような点について質問また要求をする。

- a 代名詞の「これ」、「それ」などは何を指しているか。
- b 主語を補えばどうなるか。
- c 倒置を正置にもどせばどうなるか。
- d 修飾節と被修飾語との関係はどうか。
- e 内容の事実について、因果関係、経過、背景、人的関係などについて質問する。
- f もし事実が反対であったら、文はどうなるかを言わせる。
- g 内容について意見を述べさせる。

また、外国人学生が文の理解を誤ったり、困難を感じたりするのは、次のような点である。

- a 文節の切れ目
- b かくれた主語の発見
- c こ、そ、あ、どの指示するもの
- d 修飾、被修飾の関係
- e 慣用的な言い方の意味
- f 多義語の解釈（例文）

上級の授業は、理想を言えば、次のような方法で行いたい。
当日扱う教材の範囲を教師の指名により学習者が分担して、それぞれ語句の意味、類語との異同、文の解釈、大意の要約などについて調べて来て、他の学習者または教師からの質問に答える。答えに誤りや不明の点があったら、教師が代わって答える。最後に教師が補足的解説をするという方式である。

1.4 教材について

教材の選定に当たって一般的に注意すべきことを次にあげる。

- 1) 教師の興味本位で選んではならないことは言うまでもない。
- 2) 文章が模範的だからという理由のみで選んではならない。
- 3) 内容がわかりやすいというだけで選んではならない。
- 4) 日本人用国語教科書をそのまま使ってはならない。
- 5) 文学作品を教材として使用する場合には、文学的価値からのみ選定してはならない。
- 6) 学習者が自分の専門的立場から興味あるもの、あるいは読まなければならない文献・作品を示して、教材として使用することを要求する場合に、無条件にそれを採用してはならない。

四、書き方の指導

1. 作文教育

日本語教育において作文は、平仮名・カタカナの読み書きができるようになり、初歩の基礎的な文法、文型が習得された段階から始められる。その場合作文というのは、学習者が自分の考えなり経験なりを自分自身で日本語に表現する文字化することである、特に日本の大学を卒業することを目的としている学習者にとっては、入試、期末試験、レポート提出などをひかえて、日本語での文章表現の練習は欠くことのできないものである。

基礎的な文法、文型が習得された段階というのは、日本語の短文の構造、及びいくつかの複文構造を習得した段階、つまり日本語の学習を始めてから三ヶ月ないし六ヶ月ぐらいたった時期である。それまでの間に学習者には各種の語型文型練習が教師によって与えられ、日本語での表現が簡単な文ではできるようになっている。そこで、既習の文法、文型を総合的に扱うという操作の中で、学習者は日本語をより有効に、明瞭に使用するにはどうしたら良いか、正確に生き生きと扱うにはどうしたら良いかを、その時々具体的な表現の場から考えていくという新しい段階に入るのである。

2. 書き方（作文）の指導

- ① 原稿用紙の使い方を説明する。
- ② 一度書かせてみる。
- ③ 添削を施す。
- ④ 清書させる。

しかし、作文は原稿用紙に書くものだけを指しているのではない。平仮名を習得した後、会話ですでに学習済みの自己紹介を書かせることができる。同様に、口頭練習をした項目をどんどん書かせて、それでも立派な作文である。

文字に表現させると、いかに間違った音でとらえているかがよくわかる。清濁の誤り、拗音・促音・長音の誤り、外来語の誤りが目立つ。学習者の発音を聞くと書かれてある通りなので、発音と表記の両方を訂正させなければならない。原稿用紙に書く場合、既習の文型である程度の方が表現できるようなテーマを選ばなければならない。そうでなければ、テーマに合った表現を練習してから取りかかったほうがよい。

それに、学習者が初めに作文を書くとき、「話し言葉」や「書き言葉」の区別がついていないので、そのあたりは説明しておく必要がある。話し言葉を適

度に用いれば、文章に柔らかさや親近感が出てくるとは言うものの、書き言葉の原則を理解しないままに使い過ぎると、やはり正式感に欠ける文になり、場合によっては読む人の心証を害することになろう。まず、会話でよく用いられる話し言葉の特徴を挙げよう。また、文体や段落構成や中心文についても学習者に説明する必要がある。文体には、丁寧体と普通体がある。日本語で文章を書くときには、必ずどちらかの文体に統一すべきであり、一つの文章の中では、決して丁寧体と普通体を混合して使ってはならない。作文を書くときの注意点を全部揃った後は、教室作業の進め方である。

話し言葉には、書き言葉いくつかある。音の変化による語形変化（口語縮約形）

母音の脱落：「～のです」→「～んです」

「～しておく」→「しとく」子音の脱落：「すみません」→「すいません」
「わたし」→「あたし」母音・子音の脱落変化：「それでは」→「それじゃ」

「～てしまった」→「～ちゃった」

「～なければ」→「なくちゃ」→「なきゃ」促音・撥音の挿入（促音の後続子音は音便化する場合がある）：
「やはり」→「やっぱり」

「あまり」→「あんまり」

「a i」→「e e」（口語の俗語。会話でも用いないほうがいい）

「ない」→「ねえ」

	書き言葉の文体	話し言葉の文体
口語常体	である体	だ体
口頭敬体	であります体	です体、ございます体

3. 教室作業各種の進め方

- ① 応用の場面で、既習事項をできるだけつかいながら会話をする。
- ② 話題を提示し、ある程度まで会話で導入しておいてから、同じ内容についてまとめて話をさせる。それから宿題として書いて提出させる。これは、文章をまとめること自体に抵抗を感じている学生の心理的負担を軽くするという効果を持っている。
- ③ ある目的によって選ばれたモデルになる文章（長くないもの。一パラグラフでもよい）を示し、学生の能力範囲で、また他の表現の置き換えを行う。
さらにモデルの変化形を与え、それらを参考にして文章をまとめさせる。
- ④ 日常の言語生活で表現に苦しんだ経験事項をメモしておかせる。母国語で

言わせ、適切な表現があればこちらから与える。

- ⑤ 課題に関連のある言い回しを集め、大別し、必要な場合は漢字の読み、母国語での意味を付けたものを前もって与えておく。教室では、その中の言葉を会話に使い、実際の場面での使い方を分からせてから文章にまとめて書かせる。
- ⑥ 4、5名のクラスの場合、提出された課題作文を人数分コピーし、それを共通の材料として書き手の表現意図を確かめながら訂正する。会話やスピーチの場合は、録音したものを再生し、一緒に聞きながら指導する。
- ⑦ できるだけ比較文化的な観点から、学習者が興味を示しそうな素材（新聞・雑誌などからとる）と母国語で与えておき、それについて考えたことや感想を書かせる。
- ⑧ 他の教科ですでにあつかったビデオ、スライド、読解などの材料を使用し、話し手の立場、登場人物、時、場所などを変え、応用場面での練習をする。
- ⑨ 学習上の困難点を中心にした表現の練習問題を作成しておき、学習者の能力を平均化するために必要に応じて使用する。
- ⑩ 映画鑑賞、観劇、買い物、スポーツ、旅行など、教師が学習者と行動を共にし、その経験を素材として扱う。

五、文字指導

1. 文字教育の必要性

日本語教授法の基本的な問題として、まず取り上げなければならないのは文字である。日本語の文字には、平仮名・カタカナ・漢字の3種類があって使い分けられる。漢字には、音・訓それぞれに意味と関連するいくつかの読み方があり、しかも同音字が多い。このような文字組織は日本語の持つ特質の一つであるが、外国人が日本語を習うときに避けることのできない困難な問題でもある。この文字をいかに教えるかが日本語教授法の基本的な問題の一つである。

2. 平仮名・カタカナの指導

「漢字仮名交じり」が最終目標であり、一般的な教室で教える手順は：

①平仮名 a. 五十音図 ○行と列（段）の関係。や行とわ行の不規則性

○個々の平仮名の形と筆順

○濁音・半濁音の書き方

○拗音の書き方。大きさと位置 b. かなづかい ○「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の書き分け。それぞれの発音は同じ。○長音の読み方と書き方。列による違い。ああ、いい、うう、ええ、おう、おお
○促音の書き方。小さな「っ」○助詞。「は」「へ」「を」の読み方と書き方。

②カタカナ

a. カタカナで書き表す語・外来語・動植物... b. 個々のカタカナの形と筆順 ○五十音図を使用する。 ○「シ」と「ツ」、「ソ」と「ン」... c. 濁音・半濁音の書き方 d. 拗音の書き方 e. 促音の書き方 f. 長音 ○擬声語や外来語には「一」をつかう。ザーザー、ニュース○ノート (t)、バス (s)
○日本語にない表記、サービス「v i」

③漢字

a. 漢字の数

○日本語で使う漢字はいくつあるか。常用漢字 1945 、教育漢字 996、人名用漢字 166、地名・人名の漢字 、その他。 b. 提示

する漢字

○どんな字を教えるか。教科書に出てくる漢字、新聞や雑誌で使用頻度の高い漢字、道でよく見る漢字。 c. 頻度・分布

○同じ字が教科書や教材の中にたびたび出てくる。 ○全体にバ

ランスよく配置されている。 d. 漢字の読み方○音読みと訓読み ○連濁、連音。「旅人」、「反応」 ○促音化。「決定」

しかし、初めにローマ字で、それから仮名を教えると言うことはあまりしない。確かに日本語の文字は初級者には負担ではあるが、ローマ字表記が母語に

干渉されて日本語らしい発音にならないことがある。もし、ローマ字で指導するなら、日本語のローマ字表記を説明する必要がある。

例：１．スペイン語圏学習者は“~ja arimasen”を「~ヤアリマセン」を読む。

２．英語圏学習者は“~kara~made”を「~カラ~メイド」とが読む。

３．ローマ字書きの弊害は“r”や“f”の発音にも現れる。

また、仮名の形をしっかりとらえるためには、書くのが一番だからである。書き順にも気を付けて、清音から初め、濁音、半濁音、拗音、長音、拗長音、促音、撥音などの順で表記を学習する。学習者の必要度に応じてはカタカナから先に教えることもあるが、稀である。

3. 漢字の指導

まず、漢字圏と非漢字圏の学習者を同時に教えるのはなかなか大変である。だから、できるだけ「非漢字圏クラス」と「漢字圏クラス」二つのクラスを分けたほうが授業の進行がやりやすい。

①非漢字圏クラス：非漢字圏クラスでは、漢字の成り立ちについての説明をしたりして興味を持たせるようにする。学習する漢字は画数よりも必要度の順である。教科書に出てくる漢字は一通り読み書きできるようにしなければならないので、漢字嫌いにさせないような工夫が要る。

②漢字圏クラス：漢字圏学習者といっても、何も指導しないわけではない。母国の漢字は簡体字や繁体字であり、日本語の漢字とは異なる。何よりも読み方が分かるため、つい母語に近い読み（日本語読みを類推して発音する）をしてしまう。また、意味や使い方が異なる漢字も多いので、注意しなければならない。

3.1 文字の教授法

①実物・模型・絵などを示して、それに相当する言葉を平仮名で書かせることから始める。

②音声言語の練習として行う口問口答の答えの部分を文字で書かせる。口頭で行った文型練習を文字で行うこともできる。

③あらゆる機会をとらえて文字を書かせる。住居から学校へも道順を口で言わせるばかりでなく、地図を書かせ、必要な目標、駅名などの文字を

入れさせる。このような練習によって、学生は平素、目にふれる文字に注意を向けるようになる。

- ④欠席・早退などの届けも、口頭のみでなく、日本文字で書いて提出させるようにする。
- ⑤教科書の文の完全な写しを提出させる。これによって、文字とともに句読点などを正確に使うことを覚えさせる。
- ⑥練習問題で、空いたところに単語を入れさせる問題を出すときも、記号や数字を使わないで文字を書き入れるように指定する。

4. 外国学習者にとっての諸問題

- ① 不完全・不正確な漢字、形の整わない仮名、漢字。筆記試験での、仮名を漢字に書き換えさせる問題や、教室での書き取りなどでよく見られるのと同じ誤りである。
- ② 不正確な発音の習慣からくる誤記。母音・子音、音の長短、撥ねる音、清音、濁音、濁音・半濁音、拗音など、学習者が話すときの発音上の誤りがそのまま文字に書き記されている。
- ③ 外来語の誤記。これも発音と関係があるが、意外に多く見られる誤りである。
- ④ 当て字^{注一}、漢字の誤用。日本人の場合にも見られる、もっともらしい当て字のほか、漢字の音訓と意義との遊離からくる誤りが多い。
- ⑤ 中国語の簡体字。中国人の学生が、机（機） 電（電） 際（際）などを使用した場合、日本語としては誤りとしなければならない。

^{注一} 当て字：その漢字の音や訓を、意味とは無関係に利用して、語を書き表したもの。「六書」の中の「仮借」と同じ用法である。漢字の意味にはあまり関係なく、漢字の音訓を借りて「当て字」だけの用法。「やば」という言葉に「野暮」を、「ちゃかす」に「茶化す」を当てたような熟語の読み方。「素敵（すてき）」、「咖啡（コーヒー）」、「仏蘭西（フランス）」なども当て字である。

六、音声指導

1・音声．音声学とは

音声は、即ち人類がコミュニケーションの手段として用いている言語音、そして音声学は、音声を自然科学的に研究しようとする経験科学である。

音声の産出から受容に至る過程は概略、

- ① 話者が口腔，鼻腔，咽頭，喉頭などのいわゆる音声器官(organs of speech)⁶によって言語音を産出する過程、
- ② 音波として空気中を伝播する過程、
- ③ 聴者の聴覚器官によって聞き取られ認知される過程、

の三種に分類される。従って研究分野もこれに対応して、生理（又は調音）音声学(physiological or articulatory phonetics)⁷、音響音声学(acoustic

⁶ 添付資料3。

⁷ 話し手の、のど、舌、鼻などの器官の働きと音声のかかわりを研究する音声学。音声学の生理的研究の一分野。

phonetics)⁸と聴覚音声学(auditory phonetics)⁹の三分野に分たれる。

2. 音声指導とその内容

日本語を「話す」ことの基本となる発音は、日本語学習の初期のうちから、できる限り正確を期すのが望ましい。そして、正確に発音するには、正しく聞き取らなければならない。聞き取りや発音が正確にできれば、漢字やかなを読んだり書いたりするときにも、問題がすくなくなる。そのほか、辞書を引く、あるいはコンピューターやワープロを操作するのにも効率がよい。

そのような必要性から、音声指導に当たっては、教授項目をじゅうぶんに用意したうえで、それぞれの機関の条件に合った形でカリキュラムを組むことになる。条件に合った形とは、学習者の母語、年齢、学習歴、学習に使うことのできる時間や期間、またその機関の設備その他に応じて、音声指導の時期、内容、教材、方法を適切に配分することである。

音声指導上に必要と思われる項目と注意すべき点、また練習の用例について、ここで紹介する。

2. 1 五十音

- ① 母音：調音点(point of articulation)¹⁰. 舌の高さ. 広狭の注意すること。ウはまるくちではない。¹¹
- ② 子音¹²: 調音点¹³. 口の構え. 調音のしかたの注意すること。ハ行音は、ハ. ヘ. ホとヒとフで調音点や口の構えが異なる。ラ行の r ははじく音。
- ③ 清音と濁音：サ. ザは s と z の対立。ハ行音は半濁音がある。
- ④ 直音¹⁴と拗音：シ. ジ. チ. ヒなどは拗音と同じように発音する。
- ⑤ 国際音声記号による五十音図

⁸ 空気中の音の伝わり方を研究する音声学。音声学の物理的研究の一分類。

⁹ 耳に入ってくる音波をどのような音として聞き取るかを研究する音声学。音声学の心理的研究の一分野。

¹⁰ 音声で作られる部位。音声器官図の上顎（上唇から口蓋垂まで）にあたる。その部位に下唇や歯や舌が接続また接近して音声で作られる。

¹¹ 人間の調音器官。添付資料 4。

¹² 子音図表。添付資料 5。

¹³ 子音調音点図。添付資料 6。

¹⁴ 拗音に対する語。日本語の音をかな表記にしたときに、「や、ゆ、よ」が付かない音。方言によって拗音が直音化して発音されることがある。例えば、「新宿」/しんじゅく/が/シンジク/。

74 国際音声記号による五十音図.....

ア行	a	i	u	e	o	ガ行	ga	gi	gu	ge	go
カ行	ka	ki	ku	ke	ko	ガ行鼻濁音	ŋa	ŋi	ŋu	ŋe	ŋo
サ行	sa	si	su	se	so	ザ行	dza(za)	dʒi(ʒi)	dzu(zu)	dze(ze)	dzo(zō)
タ行	ta	ti	tu	te	to	ダ行	da	dʒi(ʒi)	dzu(zu)	de	do
ナ行	na	ni	nu	ne	no	バ行	ba	bi	bu	be	bo
ハ行	ha	hi	hu	he	ho	パ行	pa	pi	pu	pe	po
マ行	ma	mi	mu	me	mo						
ヤ行	ja		ju		jo						
ラ行	ra	ri	ru	re	ro						
ワ行	wa										
ン					n						

キャ行	kja	kju	kjo	ギャ行	gja	gjū	gjo
シャ行	ʃa	ʃu	ʃo	ギャ行(鼻濁音)	ŋja	ŋju	ŋjo
チャ行	tʃa	tʃu	tʃo	ジャ、チャ行	dʒa(ʒa)	dʒu(ʒu)	dʒo(ʒo)
ニャ行	ɲa	ɲu	ɲo	ビャ行	bja	bju	bjo
ヒャ行	ɕa	ɕu	ɕo	ピャ行	pja	pju	pjo
ミャ行	mja	mju	mjo				
リャ行	rja	rju	rjo				

2. 2 特殊音節

- ① 撥音：次にくる音によって調音点や調音のしかたが違うが、音素(phoneme)¹⁵としては一つ。ンと表記される。

※日本語の / h / の音は、主に以下のとおりに発音される。

[m]：両唇音の[p. b. m]の直前。例：散歩[sampo]など。

[n]：歯茎音の[t. d. ts. dz. tʃ. dʒ. n. r]の直前。例：反対[hantai]など。

[ɲ]：歯茎硬口蓋鼻音[ɲ]の直前。例：こんにやく[ko ɲ ɲ aku]など。

[ŋ]：軟口蓋音の[k. g. ŋ]直前。例：漫画[ma ŋ ga]など。

[N]：語末、文末に現われる口蓋垂鼻音。例：本[hoN]など。

[v]：母音、半母音の直前。直後の母音、半母音の鼻母音になるか、またそれに近い鼻母音になる。例：本屋[hoija]など。

- ② 促音：1拍分の長さを持つ。外来語や強調以外は無声子音（ハ行音を除く）の前にくる。

- ③ 長音：1拍分の長さを持つ。アー．イー．ウー．エー．オーなど。ケイト（毛糸）とケートー（系統）の違い。

※ 子音規則表

子 音 規 則		
a + a	ああ（アー）	アート

¹⁵ 音韻論で意味の区別に必要な音の最小単位。音素は/ /で示す。

i + i	いい (イー)	言い方 (いいかた)
u +u	うう (ウー)	ウーマン
e +e	ええ (エー)	アンケート
o +o	おお (オー)	大きい (おおきい)
e +i	えい	賛成 (さんせい)
o +u	おう	応用 (おうよう)

2. 3 母音無声化

- ① 無声子音にはさまれた i. u. 月 (tsuki)、菊 (kiku)。
- ② 語尾の無声子音のあとの、アクセントが低の部分の i. u も無声化することがある。秋 (akii)、行きます (ikimasu)。
- ③ 語頭部分の a. e. o が無声化することもある (アクセントが低の部分で、無声子音に続くとき)。高い (takai)、敵 (teki)。

2. 4 日本語にない音：サービス (v)、サンキュー (th) など。ただし、チームとティー (共に ti)。

※ 発音基礎練習¹⁶

※ 母. 子音の発音練習¹⁷

2. 5 アクセント (accent)

- ① 型の区別：語ごとに型が決まっている。平板型 (サクラガ)、尾高型 (オンナガ)、中高型 (タマゴガ)、頭高型 (イノチガ)。個人差. 地域差がある。
- ② 上がり下がり：1 拍目と 2 拍目は高さが違う。1 語の中では、1 度下がったら、もう上がらない。
- ③ 特殊な拍との関係：長音. 撥音. 促音. 連母音の次の音では下がらない。コーギョー (工業)、インサツギョー (印刷業)、ケッコー (結構)、ハイル (入る)。
- ④ アクセント表記
 - a. アクセント表記のない場合
 - b. 「 」 のしるし tsukuru つくる ツクル
 - c. 高いところに線を引く tsukuru つくる ツクル
 - d. 下がり目をつける tsukuru つくる ツクル
 - e. 上がり目と下がり目 tsukuru つくる ツクル
 - f. 線と下がり目 tsukuru つくる ツクル

¹⁶ 添付資料 7。

¹⁷ 添付資料 8. 9。

- ⑥ 初期に気をつけていること——中国人の学生は発音を板書してほしいと言うが、言葉を「音」としてとらえるよう注意している。
- ⑦ 当校では「話せる日本語教育」を重視し、音声指導に特に力をいれている。

2. 10. 2 表現力をつける方面

- ① できるだけ自然に、感情を入れて話すようにさせる。
- ② リズム、スピードなど、日本人の発音に近づくよう指導している。
- ③ 発話の場面を設定して、プロミネンスを使わせるようにしている。

3. 教師の音声

現在、日本語教育では、一般に、共通語と目されるものが教えられている。この共通語の母体は東京語であるから、東京生まれの、東京育ちの人、またはそれに近い人にとっては、発音のモデルを示すのは容易である。しかし、実際に発音を指導するときには、モデルを示すのめでは足りない。もちろん、日常の授業で使うことによって、学習者によい影響を与えることも無視できないが、その上に音声指導で大切なことは、日本語の音声についての体系的な知識を持っていることである。その知識の応用によって、誤りの矯正や予防を有効に行うことができるのであって、ただ一途に、モデルを示して、わたしの通りに言いなさいと言うだけでは、実効は上がらない。学習者の母語の音声との相違点を示すことが必要である。

日本語教育は、つねに日本語を外国語として扱う仕事である。教師は日本語を外国語として見る態度を要求されるのである。その意味で、東京人と自認する人も、日本語の音声について、外国人の立場に立って、あらためて“学習”することが必要であろう。またそうでない人は、体系の学習ばかりでなく、自ら音声のモデルを示せるように勉強することが、日本語教師として当然のこととすべきであろう。

七、タスク活動の種類：

タスクとは、「仕事」「課題」の意味で、実際に行われているコミュニケーションの実体に近づけた教室活動を設定し、その課題を達成するためにその言語を使用する過程を通して言語を学習するものである。課題を達成するという意味では、ロールプレイやシミュレーション等もタスクである。ここでは、タスク活動タイプを中心に、応用範囲の広い

タスクタイプを集めて次のように紹介しようと思います。

- 1) 基本ギャップのタイプ：
 - a. Q&A の形式で行う Q&A タイプ
 - b. 既製のダイアログを改作して行うダイアログタイプ
 - c. 身近な絵や写真を使ったピクチャータイプ
- 2) ロール・プレイタイプ
- 3) ディベートタイプ
- 4) You're my wife タイプ
- 5) プロジェクトワークタイプ

では、各タスクタイプの例を以下のように説明する。

1. 基本ギャップのタイプ：

1.1 Q&A タイプ——【例】アンケート調査。

学習者同士でアンケート取りをする形であるなら、調査項目を学習者から募ることもできる。例えば、「ゴールデンウィークをどう過ごしたか」を取り上げ、質問にオープンに回答させることとし、調査の前に平均的な回答を以下の点について各自推測させることも考えられる²³。

他に、クラスメートの生まれた月、兄弟の間での位置、趣味、どんな経験を持っているなどが考えられる。

1.2 ダイアログタイプ——【例】インタビュー

クラスの生徒をペアに組んで、一方を日本人インタビュアー、他方をインタビューされる人とし、今双方とも日本にいるとする。そしていろいろな質問例をあらかじめ与えておく²⁴。

インタビューが終わったら、インタビュアーは結果をまとめ、クラスに報告する。この報告においておもしろい点を拾い上げ、話を盛り上げるとよい。インタビューされるロールの学習者が答え易さで自分の答えを

²³ 「ゴールデンウィークをどう過ごしたか」を例として、質問は以下のように設定できる。

①どこへ行きましたか。②なんで行きましたか。③天気はどうですか。④楽しかったか。⑤何をしましたか。

²⁴ インタビューの例：①前にも日本に来たことがありますか。②日本は初めてですか。③どうして日本に来ようと思ったのですか。④日本のいいところ、悪いところはなんですか。⑤もうどのぐらい日本にいますか。⑥日本語はどこで勉強したんですか、などがあります。

決めるのではなく、できるだけ本当のことをいいたくなるように指導する。

1.3 ピクチャータイプ——【例】 パートナー探し

教師が似通った部屋の絵（まったく同じ物複数含める）がカードに描く。一枚を教師が取り、残りを学習者に渡す。教師が自分の絵を見ながらそれを説明する。学習者はその説明を聞きながら、自分は教師と同じ絵を持っていると思ったらその時点で挙手をする。挙手した学習者に対して今度は教師が本当に同じ絵であるかどうかを確かめるために質問をする。同じ絵であることが判明したら終了。もし異なった絵であれば、同じ絵が見つかるまで続ける。

2. ロール・プレイタイプ

同じ人物が幾つものロールを果たしているのが現実の生活であり、例えば教室で先生に向かっている時には学生としてのロールを、休み時間にクラスメートと談笑している時は同輩としてのロールを、店で買い物をしている時は店員に対する客としてのロールを、隣室の住人に小包み受け取りの礼を言っている時は隣人としてのロールをとった具合である。

このようなロールの絡みから発生する現実的な問題の解決をどう図るかという課題は日常生活的な課題であるといえる。そのような問題解決を実生活に先立ってあるいはそれと平行して演じてみるのは学習者にとって意義があると同時に、これもタスク中心の指導の最も得意とする活動タイプの一つであると言える。

以下はロールプレイの可能なトピックを紹介する。

【例の一】 大学の教官と学生の間の問題

レポートの提出日を10日に指定しておいたが、急に7日から12日までの東京出張が入った。成績提出は12日である。それでA（教官）は今日3日になって、5日提出に変更を申し渡してきた。ところがB（学生）は5日締め切りの他のレポートを出してそれから書こうと計画していたので、今更そのような変更は困ってしまう。

【例の二】 急に大学が嫌になった子供と親の間の問題

A（子供）は大学が嫌になり、できるなら即刻退学したいと思っている。B（親）はそれには反対で大学くらいはどうしても卒業してもらいたいと思っている。しかも今日は前期試験の初日である。

3. ディベートタイプ

ディベートの形式としては、グループ対抗及び個人対抗がある。何れの場合もトピックを解釈・理解し、自分の立場を正確に把握させることから出発する。その上で、討論の展開を予測しそれなりの対応策を考えさせる。ここまでの教師の役割は情報の提供者である。この場合の情報とは、語の通常の意味での情報のみならず言い方についての情報も含まれる。実際の討論においては、教師は何れのグループに対しても学習者が見落としているような点を取り上げて、討論の中に入っていく。締めくくりは討論に勝った方の勝因と負けた方の敗因の分析に当てられる。

【例の一】 テレビは悪玉か

賛成：テレビは社会に悪い影響を与えるというのは事実である。

反対：テレビは人類の偉大な発明の一つである。

【例の二】 年齢はそれ自体が価値のあるものであるか。

賛成：年齢はそれ自体が価値のあるものである。人は経験を積むことによってのみ賢くなる。

反対：年齢は力のある者、例えば親や教師か、力のない者、例えば子供や学生に無理なことを強制する時に持ち出されるものでしかない。

4. You're my wife タイプ

You're my wife タイプのもっとも基本的な形は次のようなものである。四人の学習者がそれぞれ二組の夫婦をなす。ただし一人一人の学習者は自分が夫（妻）であり、探すべき相手が妻（夫）であること、また逆に自分が妻であり相手が夫であることだけは知っているが、自分を除いた三人のうち誰が探すべき自分の相手であるかは知らされていない。

例えばそれぞれの学習者は左半分と右半分に分かれた一枚のカードを持っている。左半分には夫としての自分の情報、右半分に探すべき自分の妻の情報が与えられている。自分の相手を探すために、例えば、背が低く眼鏡をかけており、肉が好き、……といった形で与えられている相手についての情報を他の三人に尋ね、その情報の項目の組み合わせを左半分の自分に関する情報として持っている相手を探し出すことになる。

ただし、この情報の項目に 40 歳、身長 162 センチメートルと規定してしまうと、お互いに交換する情報が少なくなってしまうので、広めにかつ幾つかの

項目については複数の人間が共有しているといったカード作りをしておく。

ほか、このタイプはいろんな場面でも設定できる。例えば企業が候補者に合同面接をする、或いはレストランへ行って、自分の好みの料理を聞き出して探し出す場面も応用できる。

5. プロジェクトワークタイプ

プロジェクトワークという学習形式は最初英語教育で取りあげられ、日本語教育においては従来の項目積上げた型の指導に対してより自然な全体性を確保した学習者中心の指導形式として注目され導入された。

一般にこのようなタイプの活動は初級の学習者向けとしては難しいと考えられがちである。しかし、数多くのものが実際には日本語教育の現場で既に実施され一定程度の成功を納めている。そうした中で次のようなものは初級用のテーマとして取り組みやすいと言えるだろう。

初級用のテーマとして、例えば、クラス会プロジェクト、クラスの友人のプロフィール、料理の作り方発表、学校周辺の交通機関、自分の家族紹介、日本と自分の国の食生活の違い、住所周辺の地理環境などがあります。

【参考文献】

- 1 松本節子・星野恵子 (1997) 『実力アップ！日本語能力試験これで大丈夫！（一級聴解問題）』 宇田、台北。
- 2 岡崎敏雄・岡崎眸 日本語教育学会編 (1990) 『日本語に教育におけるコミ
ュニかてィブ・アプローチ』 凡人社、東京。
- 3 鎌田修・川口義・鈴木睦編著 (2000) 『日本語教授法のワークショップ』 凡人社、東京。
- 4 木村宗男 (2000) 『日本語教授法—理論と実践—』 桜楓社 東京。
- 5 教育技術研究会編 (1995) 『教育の方法と技術』 行政学会、東京。

- 6 名柄迪・茅野直子・中西家栄子（2000）『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』 アクル、東京。
- 7 日本語教育学会編（1990）『コミュニカティブ・アプローチの今後』 凡人社、東京。
- 8 水谷信子（1999）『日本語教育の内容と方法―構文の日英比較を中心に―』 アクル、東京。
- 9 呂恵莉（2000）『台湾の日本語教育における授業活性化の研究―理論と実践―』 宇田、台北。
- 10 陳山龍（2000）「技術学院応用日本語学科にあける読解指導」 技職體系日本語教育學術研討會論文集(未出版)
- 11 日本語教育学会編集（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』 凡人社
- 12 平本照（1998）『日本語教育入門用語集』『日本語教師読本』 編集部編
- 13 高見澤孟監修（1997）『はじめての日本語教育 基本用語事典』 アスク
- 14 杉藤美代子編集 平成元年 『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声、音韻（上）』 明治書院
- 15 杉藤美代子編集 平成2年 『講座 日本語と日本語教育 3 日本語の音声、音韻（下）』 明治書院
- 16 戸田昌幸・黄國彦合著（1995）『-為中國人設計的日語語音學入門』 鴻儒堂
- 17 草薙 裕（1992）『日本語はおもしろい 考え方、教え方、学び方』 講談社
- 18 杉藤美代子（1998）『日本語音声の研究 3 日本語の音』 和泉書院
- 19 城生佰太郎（1992）『音声学 新装増訂三版』 アポロン
- 20 川和 孝（1995）『日本語の発声レッスン 改訂新版、一般編』 新水社
- 21 塩原慎次郎（1989）『声を出して読む日本語の本』 創拓社
- 22 池尾すみ（昭和49）『文章表現』 凡人社
- 23 東方東京法令出版(1996.4)『日本語教授法』 凡人社
- 24 石田敏子（1989）『日本語教授法』 大修館 東京。
- 25 日本語教育学会編集（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』 凡人社